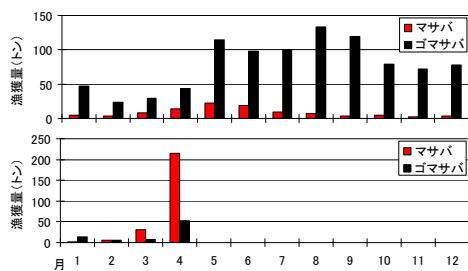




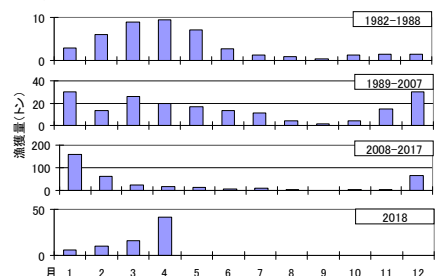
平成30年5月 静岡県水産技術研究所伊豆分場ニュース

伊豆半島東岸定置網の最近の漁況の特徴

さば類の月別漁獲量の推移
(上：1982-2017平均値、
下：2018年)



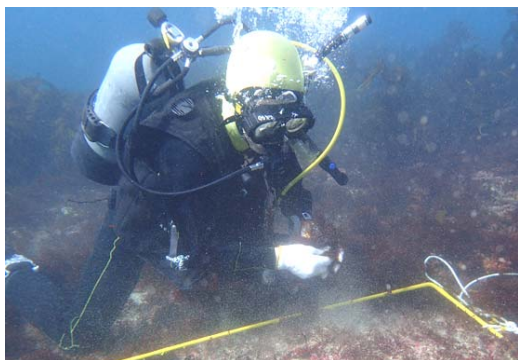
スルメイカの月別漁獲量の推移



4月の伊豆半島東岸定置網では、ブリ（ぶり、わらさ銘柄）、マサバ、スルメイカが漁獲の主体となりました。ブリは近年資源量が多く、わかし銘柄（小型魚）の漁獲量も多いことから、今後も好調な漁獲が期待できます。定置網で漁獲されるさば類は、昨年までのゴマサバ主体から今年はマサバ主体となりました（左図）。これは数年前からのマサバ資源の増加傾向、ゴマサバ資源の減少傾向が反映されたためと考えられます。スルメイカの漁獲量は1980年代まで低調でしたが、1990年代以降は増加傾向で推移しました。しかし、2015年以降減少に転じ、昨年は1980年代レベルまで漁獲量が減少しました。今年は春に漁獲量が多く、これは資源が低調であった1980年代と同様の傾向（左図）であることから、今後の推移に注意が必要です。

テングサ作柄調査の実施

今年のテングサ作柄調査は、3月13日の稲取地区から始まり、4月18日の仁科地区で終了しました。今年は天候に恵まれ、各地区の漁業者や支所の協力により13地区32箇所の調査をほぼ予定通りに実施できました。稲取地区の調査は16年ぶりで、ダイバーによるテングサ漁実施に向けての調査となりました。今年の作柄予察は、5月中旬頃までにお知らせする予定です。



解説：テングサ漁は5月頃から本格化します。古くから伊豆産テングサは高品質で知られています。近年は価格が上昇しており、重要な沿岸資源のひとつです。

熱海地区でヒラメの中間育成開始

静岡県内では、ヒラメの資源を増やすための栽培漁業の取り組みとして人工的に育てたヒラメ稚魚の放流を毎年実施しています。伊豆地域では4月24日に熱海、多賀、網代に温水利用研究センターで生産した平均体長44mmの稚魚2万尾を漁港内の陸上いけすに收容して中間育成を開始しました。例年、体長60mm以上になるまで飼育してから天然海域へ放流します。



→
陸上いけすに
收容された、
ヒラメ稚魚

解説：ヒラメの放流効果：静岡県における近年の放流魚の混獲率（ヒラメ漁獲物に占める放流魚の割合）は10～20%程度となっている。

5月の予定 ●今年のマダイ種苗放流のための中間育成の打合せが行われます。 ●田子地区で16日にカサゴが放流されます。 ●マダイ栽培漁業を推進する伊豆地域栽培漁業推進協議会が17日に下田市で開催されます。 ●熱海地区で22日にヒラメが放流されます。 ●静岡県定置漁業協会の総会が25日、伊東市で行われます。

連絡先：静岡県水産技術研究所伊豆分場 〒415-0012 下田市白浜251-1 電話：0558-22-0835

アドレス：suigi-izu@pref.shizuoka.lg.jp ホームページ：http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/izu